

無性造「攝大乘論註」序章の解説

片 野 道 雄

一 大乘の佛の言葉を集約する十の依処

二 大乘の佛道をあらしめる立場および十の依処の道次第——結び

文殊師利法王子に歸命する。

先代の軌範師によって、道理なる方軌をもって弁別されたが、劣慧者たちは了解しないから、各々の句によって「攝〔大乘論〕」が分別解釈されるであろう。

〔一〕 大乘の佛の言葉を集約する

十の依処」

十の意味によって大乘すべての意味を集約しようとして、論(sastra)の組織の自体であるそれら十の意味は尊敬すべきもの(arsatva)として説くという仕方、

大乘をよく覚了した【菩薩は、大乘の偉大性を称述せんがために、世尊の面前で、いわゆる大乘に関してアビダルマ大乘経の中において、諸佛世尊の、十種のすぐれたるによって最勝なる言葉を説いている。すなわち、(1)諸佛世尊の、「所知依」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(2)諸佛世尊の、「所知相」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(3)かの「所知相」に悟入すること^②のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(4)そこに「それ悟入するものの因と果」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(5)「その因と果の修習の別態」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(6)それ

と同じ修習の別態における「増上なる戒」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(7)「増上なる心」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(8)「増上なる慧」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(9)「その果なる断滅」のすぐれたるによって最勝なる言葉と、(10)「その果なる智」のすぐれたるによって最勝なる言葉とである。

このような諸佛世尊によって説示せる経の句は、大乘が佛の言葉なるもの (buddhavaṇanatva) であることを称述しているのである。

如何にして称述されるかといえ、何となれば、次のような説示によって声聞乗には未だ説かれていない十の依処が大乗の中に説示されているからであって、すなわち、(1)アーラヤ識は所知依を示している。(2)依他起と遍計所執と円成実との三性は所知相を示している。(3)唯記識性は所知相に悟入することを示している。(4)六波羅蜜はそれに悟入するものの因と果を示している。(5)菩薩の十地はその因と果の修習の別態を示している。(6)菩薩の律儀はそこにおいて増上なる戒を示している。(7)首楞嚴や虚空藏などの三昧はそこにおいて増上なる心を示している。(8)無分別智は増上なる慧

を示している。(9)無住涅槃はその果なる断滅を示している。(10)佛の三身、いわゆる自性と受用と変化はその果なる智を示しているのである。

声聞乗よりすぐれたこれら十の依処は、世尊によって諸菩薩に関して大乘の中で最勝にして最上なるものとして説かれたものである。それ故に、大乘に關してであって、諸佛世尊の十種のすぐれたるによって最勝なる言葉が知られるべきである。】(L. Prastāvana, 1-3, Y. p. 1-p. 4, l. 1)

云々と開始している。属性 (guṇa) としての言葉、あるいは、仮りの表示 (prajñapti) において大乘をよく覺了した「菩薩」(supravijābodhisattva) というのであって、これによって、大乘が (Peking 238a) よく了悟され (supravijābodhi)、あるいは、それをよく覺了しているが故に、大乘をよく覺了したものである。大乘をよく覺了したものであり、陀羅尼 (dharanī) と弁才 (pratibhāṇa) との徳を得たものであり、偉大なる義を把握し、そしてよく顯示することのできる彼菩薩によって、あるいは、かくの如き名称 (nāma) のあるものによって「十種のすぐれたるによって最勝なる言葉は」説かれているのである。菩薩

(bodhi-sattva)と云うのは、^⑦これは菩提(bodhi)と有情(sattva)とを所縁とするのであるから(nupalabhyamānarat)菩薩であつて、sattvaという声はここにおいて生きとし生けるもの(prāṇin)を語っている。また、所縁ということによつてもかくの如くに見られるのであつて、例えば不浄(aśubha)などを所縁とする三昧(samādhi)のために不浄とか空性(sūnyata)と云い、また、惡所作(kukṛta)を所縁とする後悔(vipratīśāra)のために惡作(kaukritya)といわれる如くである。あるいはまた、これは菩提のために耐えるから菩薩である。大乘の偉大性(mahāmya)とは甚深(gambhīra)と廣大(audārya)との二をもつて無上なることである。^⑪性(guṇya)の性は性質(svabhāva)や作用(kṛya)の言葉であつて、例えば、火は熱を性質とし、毒は死すべきことを性質とするもの(guṇaka)であるといわれるが如くである。これ「大乘」は偉大性を性質とするものであるから偉大であつて、その体(bhāva, vastu)は偉大性である。それ(大乘の偉大性)を称述する(uddhāvāna)とは諸余のものは自ら「そのことを」知らないから、それを開示(prakāśana)するのである。ために(artham)とは目的(prayojana)が示される。世尊の面前(ḥhagavatpuraṣṭān)と云う中、四魔を破ることや自

在(īśvara)などの徳がそなわっているから世尊であり、佛である。それはどうしてかといへば、佛世尊といううに後に著わされているからである。彼の世尊の面前で(Peking 233b)とは、佛の開許(anujāna)による信賴性(viśvaśānyatva)を示すものであつて、教示(śeṣāna)と近接しているとき「それとは」異なったものとして語らないからである。^⑮いわゆる(yad uta)とは十の依処を論立(upany vas)しているからである。^⑯大乘に関して(rabhya)とはそれ「大乘」のために(artham)、あるいは、ついで(adhikṛtya)であつて、声聞乗や世間に関してではない。また、大乘というのはいはこれ「大乘」のみに関するのであつて、余のものに關してではないと決定されるべき(miscetāya)ものであるからである。何となれば、世間的なものに關係して、
諦に(satyatas)語られるべき(abhidheya)である。
忿(krodha)をなさず、求められること少しでも施与せられるべきである。
云々といふのは、諸余のすがたより最勝なる佛の言葉であるからである。声聞に關するとき、
ああ、諸行は無常である。生じ滅する性質あるものである。^⑰

云々というのは諸余のものより最勝であつて、それであるから、「そのように」決定されるべきものとして理に合する。

「アビダルマ大乘経」において「説かれる」とは、釈法(dharmapracicaya)の根拠(netu)となり、極成(śāstīddha)となるが故に、アビダルマ(abhidharma)として概念の立てられる(samīhakarāna)すぐれた大乘経の中に於いて説かれるが、別のものの中には説かれない。それは乗でもあり大でもあり、あるいは、諸大の乗であるから、大乘である。因と果が偉大(mahatmya)なるが故に、作用と所趣(vācya)との成就する事体(vastu)であるからである。要約すると、「それは」菩薩の十地にして果を具有する^②。広説すると七種の大性(saptavidhamahatva)を具するからであつて、諸菩提(Peking 234a)分と諸波羅蜜と諸学と持(sadhara)と証相(linga)などが大乘である。それ「大乘」の経(sūtra)とは「それらが」語られているが故にであつて、散文(gadyam)と韻文(pādyam)との声としての顕現であり、意趣せられたもの(abhinēārtha)のすがたに随つて起つた所聞の認識の句である。もしそうであるならば、菩薩によつてそれがどうして説かれるか。所聞の認識は彼によつて未だ説かれ

ていないといへば、彼(菩薩)の力によつて起つたのであるから、かくの如くいわれるのであつて、天などの力によつて夢の中で論(sāstra)や密呪(mantṛa)などの把握されるが如くである。そうでないと、語(vāc)の知らしめることがあつても、佛による所説は如何にしてあることになるか。しかるに、ともかく語の自性は経として理に相応しない。何となれば、それぞれの文字(vyākāraṇa)は意味を了解するものとしてあり得ないからである。また、次第して生じ同時に不住なるものも聚(eka)としてあり得ないからである。かくの如く自体の未だ把握されていない語は名(nāma)を起すものとしてあり得ない。文字を自体としない声が起つても名は少しも明瞭とならないのであつて、かくの如く名の自性も亦経として理に相応しない。それ故に、説示される如くにあるものこそ経として理に合するのであつて、アビダルマと名づけられるかの大乗経の中にある。「十種の」種(viśha, prakāra)とは bhedā であつて、それら「十種」こそ相互に混乱のないこと(avyavakīrṇa)によつてすぐれたもの(viśga)となるとき、すぐれたものであり、あるいは、声聞などの諸法より卓越したもの(prakarsa)であり、また、顕著(parīṣṭa)なるが故に、すぐれている。すなわ

ち、大菩提 (mahābodhi) を成就するからである。十とは数 (saṅkhyā) (Peking 234b) であって、佛の言葉が数えられ、最勝 (vīṣiṣṭa) であるが故に論の体は安立せられる (vyavasthāpyate)。これらの言葉は十種によって最勝であるから、諸佛世尊の十種「のすぐれたる」によって最勝なる言葉という。佛とは染汚と不染汚との二の癡 (moha) の睡眠が尽き、一切の所知のために智が開かれているが故に佛であって、目覚めた人 (purusa) のごとくである。咲いた白蓮 (kunda) の花のごとくである。

〔1〕所知依の所知 (jñeya) とは知られるべきもの (jñātavya) である。依 (依処・āśraya) の声によって「知られるべきものを」開顯せしめる (vibhāvita) が故に、諸依処は諸有為であって、雑染となり、また清淨ともなる諸法である。けれども無為ではない。依の意味をなさないからである。それら「諸有為」の依処はアーラヤ識であって、因でもあり、所依 (āśraya) でもあるから、所依の如く適応する。所知こそ所知の所依となるのであって、しかも所知性は異熟識と矛盾しない。所知依こそすぐれたものであるから、所知依のすぐれたるであって、それによってこれらの言葉は最勝であるから、所知依のすぐれたるによって最勝なる言葉であり、諸佛世尊のという

ようにすべての場合に基本となり適応する。

〔2〕所知相 (jñeyalakṣaṇa) とは所知の自性 (jñeyasvabhāva) であって、それは表相されるものであるからである。三性 (trisvabhāva) といわれる中づ (Peking 235a)、「円成実」は体 (bhāva) であるから自性である。遍計所執は自性に似ているものであるから自性である。「依地起は」迷乱 (bhraṇṭi) の因であり、自性の依処であるから、依他起の自性である。そこで、円成実の相 (lakṣaṇa) は一切法の中に相応せるものであるから、共相 (sāṃyālakṣaṇa) である。依他起は身「有身」などなる迷乱の諸認識〔3〕にして相互に異態となるのであるから、自相 (svalakṣaṇa) である。地界などの如くである。例えば、地界は堅いとして識別するとき、異なったものではなくとも堅い相であると語る如くである。また、例えば、大人 (mahāpurusa) の相や経部の生などの如くである。それによって、それは所知でもあり、相でもあり、あるいはまた、所知の相でもあるから、所知相である。それは異なったものでもなく、また、異なったものでも異なったものでもないことから、解放されたものであるから、所依の如く適応する。それによってこれらの言葉は最勝である。

〔3〕これによって所知相に悟入するのであり、あるいは

これが所知相に悟入するものであるから、入所知相である。入(悟入・praveśa)とは現觀(ābhisamayā)である。

唯記識性とは入所知相である。それはまさにすぐれており、それによってこれらの言葉は最勝である。

(4)それ悟入するものの因と果とのすぐれたるによって最勝なる言葉とは、悟入というのが唯記識性であって、その因とは信解行地(ādhimuktīcaryābhūmi)において実修するときの(Peking 235b)世間的な未清淨なる諸波羅蜜である。果とは通達時にそれら「諸波羅蜜」こそ出世間的となったものであって、清淨なる増上意樂(suddhā-dhīśāyika)によってきわめてよく保たれているものである。それらはまさにそれによって悟入するものの因と果のすぐれたものであって、それによってこれらの言葉は最勝である。

(5)その因と果の修習の別態という中で、それと同じ唯記識なるものの因と果がその因と果である。修習とは繰り返し実行することである。それによって「段階的に」区分されているのであるから、その因と果の修習の別態であって、十地を自性とする。それはまさにすぐれたもので、それによってこれらの言葉は最勝である。

(6)波羅蜜が繰り返し実行される異態なるそれら諸地こ

そにおいてそれを保つために精勤するとき、そこで修学するのであるから、三学(sīlka-traya)が安立される。戒に関する学は増上なる戒(ādhisīla)の学であって、それら諸地こそにおいて「不善の」遠離なる菩薩の律儀(sīlā-pāra)と、有情の利益をなすことと、一切の善を実行することの三種の戒が受持される。所化(vinaya)を手綱(rasmi)をもって導く御者(sarathi)の如く、邪道に心を向けた(unmārgapratipanna)身などの諸業がそれによって制止されるとき、律儀である。かくの如く「その」学こそが増上なる戒であって、戒にともなうて実行するからである。増上なる戒はまさにすぐれたものであって、それによってこれらの言葉は最勝である。

(7)心に関する学は増上なる心(ādhicitta)の学である。(Peking 236a)首楞嚴や虚空藏などの三昧は(śrāṅgana-gaṅganāṇjādisanādhīna)云々とううのは、賢護(Bhadrāpala)や三昧王(samādhīrāja)などが集約される。増上なる心の学について、

三昧こそ心なりと大師(saṃgī)によって説かれる。⑧⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
㉖
㉗
㉘
㉙
㉚
㉛
㉜
㉝
㉞
㉟
㊱
㊲
㊳
㊴
㊵
㊶
㊷
㊸
㊹
㊺
㊻
㊼
㊽
㊾
㊿
といて、心のすがたは画かれたもの(citra)であるから、業として示される如くである。

(8)慧に関する学は増上なる慧(ādhīprajñā)の学である。

無分別智 (nirvikalpañāna) は一切の戲論 (prapañca) なる分別の対治である。

そこで、実修するもの (prayogin) の根本 (maṇḍi) に關係し、その後に得られたもの (tadapīṣṭha-labdha) に關係し、その無上なるものに關係して、これら戒と定と慧の学は道を自性とする。

(9) (10) その果なる断滅 (tadaphalaprāṇa) と智 (ñāna) との二のすぐれたるによって最勝なる言葉であると示しているのであって、これら諸学の果がその果である。

それは果でもあり、「二障」^④の断滅でもあるから、その果なる断滅であって、愚弄的な障 (āgantuka-āvaraṇa) を離れたものであり、如性 (tathatā) であり、解脱せるものである。無住涅槃 (apratisthitanirvāṇa) は寂靜性 (śāntatā) として見られるが故に、輪廻こそ涅槃であって、それ智は染著 (saṃcitta) に住するのでない。けれども、無余依涅槃界が安立されていなのでない。それがまさにすぐれたものであって、それによってこれらの言葉は最勝である。

これらの諸学の果はその果であって、(Peking 236b) それがその果でもあり、智でもあるから、その果なる智である。佛の三身という中で、自性身 (svabhāvikā-

kāya) は離垢にして無碍なる智であって、法身 (dharma-kāya) という意味である。それでは、兩者ともに分別の現行しないとき、無分別^④とこれとは如何なる区別があるかといえ、それ「無分別」は能対治 (pratipakṣa) であって、作すべきことを具する。これ「自性身」はそれ「無分別」の果であり、作すべきことをなしたもので、このことが「それらの」区別である。受用 (sāmbhogika) 「身」はそれ「自性身」によって得られたもので、彼のすぐれた智によって、智最勝なる偉大なる諸菩薩 (mahā-bodhisattva) たちとともに不共なる法の受用を享受する。外「に向っての」清浄なる智がなくては菩薩^⑤のなすべきことも余の資糧 (sambhāra) も円満とならないのである。変化 (naimaiika) 「身」はかの後得智 (tadapīṣṭhalabdha-ñāna) なるものの別態である。それによって真実 (tattva) を忘失せず、菩薩の受用を捨てないから、初業の菩薩たちや声聞たちに作すべきことをなし遂げる。眼根とそれの識と色との譬に適應する^⑤。それがないうときこれが^⑥ことになるのである。それがまさにすぐれたものであって、それによってこれらの言葉は最勝である。^⑥

声聞乗よりすぐれたものとはそれ「声聞乗」には説かれていないからである。これら十の依処 (āśāsthanāni)

とはそれらにおいて大乘のすべての意味が安立されているから、依処であって、依事(vastu)という(Peking 237a)意味である。「それら十の依処は」およそ菩薩によって菩薩のために説かれたものであると称述する道理により、「本論において」世尊によって「諸菩薩に関して大乘の中で最勝にして最上なるものとして」説かれたものであると語るのは、佛の面前で彼の許しをへて説かれたからである。すなわち、十地「経」などの如くである。それ故に、「先に」世尊の面前でと述べているのである。最上なるもの(agratva)とは佛果(Buddhata)となることの説かれているその道が最上であるからである。(Peking 232b-237a, 玄奘訳・大正三一、三八〇頁a—三八二頁e, Hakamaya pp. 1-10 参照)

【二 大乘の佛道をあらしめる立場

および十の依処の道次第—結び—

【如何にして、如来のこれら十種のすぐれたるによつて最勝なる言葉をもって、大乘は佛の言葉なるものであると顯示されたことになり、声聞乗は大乘として享受されないと否定されたことになるか。しかるに、尤もこれら十の依処は声聞乗のための教説として見ら

れない。けれども、大乘のために見られるからである、というならば、これら十の依処は大菩提をよく成就せしめるものであって、一切智智を証得するものとしてよく相応し、順応して、矛盾がないのである。ここに偈頌がある。

(a)所知依と「所知」相とそこに悟入することと、その因果とそれ「因果の修習」の別態と、三学とそれの果なる断滅と智「とを示す」乗は最上となれるものであり、最勝である。^⑤

(b)何となれば、この教説は他には見られず、これらは最上なる菩提の因として見られるが故に、十の依処を説くことによって最勝である大乘は佛の言葉であると認められる。

如何にしてこれら十の依処の次第はかくの如く説かれたかといえ、すなわち、(1)菩薩によって、まず始めに、ともかく諸法の因に善巧なるに依つて、縁起に善巧なることが遂げられるべきである。(2)それに続いて、増益と損滅との辺の誤失を捨離することに善巧なるによるのであって、それら縁起の法の相に善巧なることが遂げられるべきである。(3)かくの如く実修せる菩薩によってよく把握されたその相は証得されるべき

であって、それによって諸障から心は解放される。(4) それに続いて、所知相に通達して、清淨なる増上意樂に依るのであって、先に実修するところの六波羅蜜は証得し成就されるべきである。(5) それに続いて、清淨なる増上意樂所攝のそれら六波羅蜜は十地として明らかにされるのであって、三阿僧祇劫修習されるべきである。(6)(7)(8) それに続いて、菩薩の三学が円満とされるべきである。(9)(10) 円満となって、その果なる涅槃と無上正等菩提が現等覺されるべきである。

それら十の依処の次第は以上の如くに説示されたのである。

しかるに、この教説において大乘のすべては円満となつてゐるのである】(L. Prastāna, 4-5, Y. p. 4, l. 2- p. 6, l. 4)

如何にして、如来の、これら十種のすぐれたるによって最勝なる言葉をもって「大乘は佛の言葉なるものである」と顯示されたことになり、声聞乗は大乘として享受されないか否定されたことになるか。」云々というのは、あり得ないことであると疑うので、述べたものである。すなわち、六句義 (padārtha) などは声聞乗のための教

説として認められなく、勝論 (Vaiśeṣika) などのためにはそれが認められる。けれども、そののみをもって勝論なども佛の言葉 (buddhavacana) となるのでないから、別な主題となることを意にとめて、これら十の依処は大菩提をよく成就せしめるものであって云々というのである。それは菩提でもあり大でもあり、あるいは諸大の菩提であるから、大菩提である。「それは」智と断滅とのすぐれた自性であって、

煩惱と所知との障が断ぜられる。その断滅によつて

離垢 (vimala) にして無碍 (apratihata) なる智がある。

これが四種の菩提である。

と説かれてゐる如くである。それ「大菩提」をよく成就せしめ達成せしめるもの (prāpana) は十の依処であるが、六句義、あるいは、「数論流の」勝性 (pradhāna) などではないのであるから、それら「六句義や勝性」は佛の言葉でない。(Peking 237b) よく相応 (supapanna) しとは量 (pramāṇa・証権) を具するが故にであつて、すなわち、後に決択されるべき (miscetavya) である。順応 (anukūlya) しとは現前となるからであつて、随順する (anukūlya) という意味である。矛盾がなく (aviruddha) とは誤失 (dosa)

がないからである。何となれば、六句義などの知識や声聞乗は誤失をともない佛果と相異するように、これら十の依処はかくの如く「佛果と相異し」ないからである。

ここに偈頌があるというのは、先に語ったものに続いて示される意味が説かれている。何となれば、この教説は他には見られず、云々というのは大菩提が現前となつて、数と次第の所用 (prayajana) が理に適つたもの (sopapatti-katva) として開示している。

すなわち、菩薩によつて、まず始めに、ともかく諸法の因に善巧なるに依つて (kausalyaṃ nisṛitya)、此なる因より彼なる果が生ずる。彼なる果の因は此であるというように、縁起に対して善巧なることが遂げられるべきである。従つてそれ「果」は因の教説がなくしては知られない。しかるに、因はアラーヤ識であつて、無因 (ahetu) と不平等因 (viśama-hetu) との捨離によつて説かれているのである。

それに続いて、増益と損減との辺の捨離によつて、それら縁起の法の相が知られるべきであつて、無と有とを共に一向に施設せしめるのが増益 (samāropa) である。

有を損減し除去するのが損減 (apavāda) である。これら増益と損減との二の辺 (anta) とは断崖 (prapāta) という

意味である。この二 (Peking 238a) に立場をおくとき、中道を見失うことになる。それ二を捨離することに善巧なるものは正しく妙觀察するもの (pratyavakṣaṇa) であつて、無なる遍計所執を増益することがなく、損減しない。「遍計執されたものは実に」無の故にである。「善巧でないものは言説としての」有を損減するからである。また依他起を増益しない。「言説の所依性として」有の故にで、「善巧でないものは」無を増益するからである。また、損減もしない。唯迷乱 (bhrāntimātra) として有の故にである。円成実を増益しない。「無分別智の行境として」有の故にである。それと同じことの故に損減しない。あるいはまた、ここで、増益と損減との辺を捨離することに善巧なるこのものは、依他起において遍計執されたものは無であるから増益することがなく、そして、円成実なるものは有であるから損減することがない。

二辺を捨離してかくの如き三性に善巧なるに依つて、唯記識性として語られるところの所知相が証得されるべきである。証解 (avabodha) とは証得 (adhiḡama, pratividha・通達) であつて、悟入 (avatara) でもあり、また現証 (sākṣātkarāṇa) でもある。あるいは、凡そあるものによつて証得されるのである。

それに続いて、悟入としての彼の唯記識性と順応せる世俗の六波羅蜜が勝義として証得されるべきであって、清浄なる増上意樂(suddhadyāsaya)によって理解されるべきである。意志(chanda)とか信解(adhimukti)が意樂であり、正解浄信(aveśyaprasāda)によって集約されるが故に、その場合それら二は甚だ大である。悟入とは三菩提(sambodhi)としての現觀(ābhisaṃmayā)と同義である。十地において三学を学び、三阿僧祇劫(trikaṃpaśankhyeyam)修習することによって、それら「三学」はまさに円満とされるべきである。それに続いて、その果としての、煩惱と所知との障の斷滅^⑧と、離垢にして無碍なる一切智智が了得されるべき(prāptavya)である。

〔結 ぶ〕

以上の如く、次第と数の所用(prayojana)や大菩提と順応することも主論(mukhya)と随應論によって詳述された(prasaṅgenopavaritah)のである。しかるに、次第はただこれのみであり、数も亦十のみであって、少なくとも多くもない。

然るに、「声聞乗の」果は「かくの如き次第と数とについて」区別のないものとなるから、声聞の道がすなわ

ち佛道であるとするのは理に相応しない。実に、菩薩に關して声聞乗の中には如何なるところにも佛道は説かれていないのである。そして、佛は声聞より最勝でないというようにも認められない。教主(saṃst)と学徒(sisya)との安立(師資建立)がないことになるからである。それ故に、道のすぐれた何らかのウパデーシャが説かれるべきであって、しかも、その「ウパデーシャ」はこの大乘より異なったものとするのは不合理である。それによって大菩提をよく成就せしめるが故に、大乘が佛の言葉なるものとして知られるのであって、佛の道は佛に非ざるものによって説くことができないのである。しかるに、

この教説において大乘のすべては円満となつているのであるとは、不動(ūrtiṣṭra)の故にであり、最勝なる因と果のすべての形相が説かれているからである。それ故にこれが攝大乘である。あらんかぎり、また、あるがままに、^⑨すぐれたものが説かれているからである。(Peking 237a³—238b⁸, 玄奘訳・大正三一、三八二a—c 参照, Hakamaya pp. 10—14)

略号および註

Peking 北京版チベット大藏經
Dege デルゲ版チベット大藏經

L. E. Lamotte: *La Somme du Grand*

Véhicule, 1938-1939

Y. 佐々木月樵『漢訳四本対照撰大乘論 附西

藏訳』

Nagao 長尾雅人「撰大乘論世親釈の漢藏本対照」

『東方学報』京都第十三册第二分所収

Hakamaya N. Hakamaya, *Mahāyānasamgrahopā-*

nibandhana (I), (2) — Its Tibetan and

Chinese Texts, 『駒沢大学佛教学部研究紀

要』第三十一、三十二号所収

Piṇḍavyākhyā Vivṛtagūḍhārtha-piṇḍavyākhyā, Peking

No. 5553, Toh. No. 4052

Mi pham Theg chen bsdus pa'i stñin po mehan,

Collected Writings of 'jam mgon 'ju Mi

pham rgya mtsho (AD. 1846-1912), Vol.

II, by Sonam Topgay Kazi, Ngagytur

Nyingmay Sungrab vol. 70, Gangtok,

1975

〔 〕内 本文その他にふつ補う言葉

() 内 直前の語句を説明する言葉

サイドライン 論の本文におけることを示す

論の本文を試訳するに当り、Y. を基本として Derge を参照し、無性の註釈については Peking を基本として

Derge および Hakamaya を参照した。本論序章に対す

る無性の註釈の漢藏比較対照は既に前記袴谷氏によって綿密なる研究成果が報告されており、それによらたい。

本論序章の理解の上に、その他、主なるものとして荒牧

典俊「撰大乘論の序章」(『インド学試験論集』Nos. 6-7 所収)、

宇井伯寿『撰大乘論研究』を参照した。

なお、序章の分節一、二は、無性註によって理解せられるところに従って、かりそめに試みたものである。

① Peking, 'ses bya'i mtshan nid la, Derge ... nid de la
ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་

② Peking, gsun dan / 'jug pa, Derge ... dan / de la 'jug
pa ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་

③ Peking, gsun ho // mdo'i tshig, Derge, gsun ho // sans
rgyas bcom ldan 'das rnamis khyis mdo sde'i tshig ཨ་
ཨ་ཨ་ཨ་

④ Peking, drug po dag ni des, Derge ... ni de la ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་

⑤ Peking, yon tan gyi tshig gi brtags pa la, Derge
... tshig gam brtags... ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་ཨ་

ཨ་ཨ་ཨ་ Piṇḍavyākhyā, theg pa chen po la śin tu zugs
pa 'zes bya ba ni / brtags pa 'im yon tan phun sum
tshogs pa yin te / (Peking 357a²⁻³)

⑥ 卅幾註 theg pa chen po la śin tu zugs pa'i 'zes bya
ba ni gzuns la sogs pa'i yon tan rab tu thob pa 'zes

bya ba'i don te/ yon tan de dag thob pas kyan don
dan tshig yan dag par 'dzin pa dan/ rab tu ston pa
ñid du 'ais bstan pa'm/ de lta bu'i min can gyi
byan chub sems dpas so/ (Nagao p. 144)

㊴ Peking, *zés bya ba 'di*, Derge, *zés bya ba ni 'di*.

㊵ Pindavyākhyā, byan chub sems dpa' *zés bya ba ni/*
byan chub dan sems can la dmigs pas na tha sñad
du btags te/ mi sdug pa la sogs pa bzin no/ (Peking
357a^b-b¹)

㊶ Peking, de skad bya bar. Derge, de skad ces bya bar.

㊷ Peking, theg pa chen po che ba'i, Derge...chen po'i
che ba'i.

㊸ Pindavyākhyā, 'di thams cad kyi che ba'i bdag ñid
ni zab pa dan rgya che ba dag gis bla na med pa
ñid do/ (Peking 357b²-³), Mi pham *zē zab ciñ rgya*
che ba'i theg pa chen po... མཉམས་པོ་ཙམ་པ་དང་རྒྱལ་
ཆེ་བའི་བདག་ཁྱིད་... འཇམ་ཐོག་པོ་ཙམ་

མཉམས་པོ་ཙམ་ Mahāyānasūtrālaṅkāra 12'

āudāryādapi gāmbhīrātparipākō 'vikalpanā/
deśanāto dvayaśāsmi sa copāyo niruttare //13//
aneha ślokeṇa kiṃ darśayati/ prabhāvādāryadeśanayā
sattvānām paripākāḥ prabhāvādhimukto ghaṭanā/
gāmbhīryadeśanayā avikalpanā ata etasya dvayas
yāsmi mahāyāne deśanā sa copāyo niruttare jñāne...
(Skt. ed. S. Lévi, p. 5, ll. 18-22)

འཇམ་ཐོག་པོ་ཙམ་པ་དང་རྒྱལ་ཆེ་བའི་བདག་ཁྱིད་...
འདུག་པོ་ཙམ་པ་དང་རྒྱལ་ཆེ་བའི་བདག་ཁྱིད་... 安慧の註は次の如く説明している。

bla na med pa'i byan chub thob par bya ba'i thabs
ni rnam pa gñis te/ rgya che ba'i don dan/ zab pa'i
chos so// de la sa dan pha rol tu phyin pa dan/
minon par śes pa dan/ stobs dan mi 'jigs pa la sogs
pa ni rgya che ba'i chos so// gan zag dan chos la
bdag med pa ni zab pa'i chos so// yan na bsod namis
kyi tshogs ni rgya che ba'i chos so// ye śes kyi tshogs
ni zab pa'i chos so// de la rgya che ba'i chos bstan
pas ni sems can yōns su smin par 'gyur te/ de bzin
gśeḡs pa'i yon tan mthu chen po dag thos nas/ dad
pa'i sgo nas sems can dge ba la 'jug par 'gyur ba'i
phyir ro// zab pa'i chos bsgoms pas ni bdag ñid rnam
par mi rtog pa'i ye śes 'thob par 'gyur te/ de ltar
bdag gi don dan gzan gyi don du 'gyur ba'i chos zab
pa dan rgya che ba gñis theg pa chen po 'di las bstan
pa'i phyir/ theg pa chen po 'di bla na med pa'i byan
chub 'thob par byed pa'i thabs yin no/ (Peking Mi.
25b²-26a², Derge Mi. 24a²-b²)

㊹ Pindavyākhyā, bdag ñid ces bya ba'i sgra ni rai
bzin dan 'bras bu'i tshig tu grags te/ dper na me ni
tsha ba'i bdag ñid/ dug ni bsod pa'i bdag ñid ces bya
ba lta bu'o/ (Peking 357b³)

㊺ Peking, ran gis de mi śes pas rab tu bsad pa'o,
Derge, ran gis mi śes pas de rab tu...

㊻ 世親の「釈軌論」に「世尊の言は、自在と妙相
と称讃と吉祥と智と精進との六が圓滿している」とある。

またこう、世尊と一切の悪魔と反対論者とを摧破するからいふ」といふ。山口益『世親の浄土論』四九—五〇頁参照。Peking 46b-47a (影印 vol. 113, 250-5-6~251-1-1) の取意。

⑮ 世親註¹⁾ bcom ldan 'das kyi spyar snar zes bya ba ni 'bad pa dan gus par bcas pas tshig gzan du ma yin pa'i don to/ (Nagao p. 144). Pindavyākhyā, bcom ldan 'das kyi spyar snar zes bya ba ni/ sans rgyas kyiis gnan ba 'ñid kyiis yid ches ba 'ñid du ston te/ ston pa dan ñe na gzan du mi smra bai phyir ro/ (Peking 357b³⁻⁴)

⑯ Pindavyākhyā, 'di lta ste zes bya ba'i sgra ni tshig gi don bcu po ñe bar dgod pa'i phyir ro/ (Peking 357b⁴⁻⁵)

⑰ 世親註²⁾ theg pa chen po las brtsams nas zes bya ba ni de'i dban du byas nas so/ (Nagao p. 144)

⑱ Pindavyākhyā, ñan thos dan thun moñ ma yin par ñes par 'chad par 'gyur pas theg pa chen po kho na bsadus so/ (Peking 358a¹)

⑲ Peking, nam pa gzan dag gis, Derge...dag las 2-4¹⁰。

⑳ 涅槃經における無常偈なる四句の前半、「諸行無常是生滅法」に相当する。瑜伽師地論にも見られる。大正三〇・三七八〇、七五〇b。『山口益佛教学文集』一八五、四一—三頁参照。なお、無性註のチベット訳は kye ma 'du byed rtag pa med skye zin jig pa'i chos can yin y

あるが、世親の釈軌論では "...du byed nams mi rtag/ skye zin...

⑲ 調伏天造唯識二十論釈疏にも、持業釈で語源解釈せられる大乘の理解を示し、更に「それ故に菩薩の道にして果を具有するのが大乘であると説かれる」とも、「大とは彼に非ざる余乗より、勝上となるものであると知るべきである」「又は大とは七種大性を具するからである」とも説明している。山口・野沢『世親唯識の原典解明』一七一—一八頁参照。Peking 202b³⁻⁵ (影印 vol. 113, 313-2-3~5)

⑳ 七種の大性について山口益訳註『中辺分別論釈疏』三二—三三頁註、舟橋尚哉『十二分教と三藏・二藏との相撰關係について』『大谷学報』五七卷第三号所収、三〇—三三頁など参照。

なお、世親の釈軌論においては次のように述べている。「広乗も亦大乘であつて、七種の大性を具するからである。七種大性の中、(1)法の大性は十万等の経蔵の無量なるものを具するからである。(2)発心の大性は一切有情の利益のなされる、生ずることのある徳と、過失のなくなること、すべてを究め尽す所依である無上正等覺に向つて心を発すからである。(3)信解の大性は甚深にして广大なる法を信解するからである。(4)意樂の大性は清浄なる増上意樂の地において一切有情のために自他平等性としての意樂を獲得するからである。(5)資糧の大性は地に入るときに各々の刹那において無量なる福德と智慧の資糧を積集するからである。(6)時の大性は三阿僧祇劫いくたびとなく精勤するからである。(7)成就の大性は一切有情と等しくない佛身をよく成就

⑤7 Peking, theg pa la bstan par rigs la/, Derge, theg

pa bstan par mi dmigs la/, Hakamaya, theg pa la
bstan par mi dmigs la/ གཤམ་པ་ལ།

⑤8 卦藏註⁵⁹ śin tu 'thad pa źes bya ba ni rigs pa la
sogs pa'i tshad mas brtags nas [ji ltar] bstan pa'i
lam gyi rgyu mtshan te/ (Nagao p. 164), śin tu 'thad
pa ni rigs pa'i tshad ma gsum dan mi 'gal ba'o/
(Nagao p. 166), Pinḍavyākhyā, śin tu 'thad pa ni yons
su grub pa ste/ tshad ma dan mi 'gal ba'i phyir ro/
(Peking 363b7)

⑤9 卦藏註⁶⁰ mthun pa źes bya ba ni mñon par rtogs pa
la rab tu sbyor ba na rjes su mthun par gnas pa ste/
ji ltar lam bstan pa rjes su mthun par gnas pa bzin
no/ (Nagao p. 164), mthun pa źes bya ba ni snar
rjes su mthun par 'gyur la/ phyis 'gal ba ma yin te/
(Nagao p. 166), Pinḍavyākhyā, mthun pa ni gzan gyi
dhan ste/ rnam par byan ba dan mthum pa'i phyir
ro/ (Peking 363b7), rnam pa bcu ba car mñon sum
gyi tshad ma dan ldan pa'i phyir/ śin tu 'thad pa'o/
(Peking 363b8)

⑥0 Peking, rnam par śes pa ste/, Derge ... śes pa yin
ste/.

⑥1 Prasannapadā, tadevañ hetupratyāyāpekṣaṃ bhā-
vānamupadāñ paridīpayatā bhagavatā ahetvekahetu-
viśamahetusānubhūtatvañ svaparobhayaḥkṛtatvañ ca
bhāvanāñ nisiddhañ bhavati (ed. L. de la Vallée

Poussin, p. 10, ll. 11-12)

⑥2 玄奘記「於無無因，強立為有，故名增益」⁶¹

⑥3 Pinḍavyākhyā, skur pa 'debs pa ni thams cad kyi
thams cad du kum rdzob tu yan sel ba'i phyir ro/
(Peking 365b9)

⑥4 中辺分別論真実品②相真実のト、第四偈、第五偈前半參
照。「眞説の所依性ニツ有」の理解は、この「相真実」の
トの安藏註に於て、tat punaḥ kalpitayā grāhyagrāha-
kāṃnatayāsattvañ tadvyavahārāśrayatvena ca satt-
vam/ (ed. S. Yamaguchi, p. 115, ll. 4-5, ed. R. Pandeya,
p. 86, ll. 31-32)

⑥5 Peking, spans pa, Derge, spans pas གཤམ་པ་ལ།

⑥6 卦藏註⁶² yod pa ma yin pa'i kun tu brtags pa la
yod par mñon par zen cin sgro btags pa ste/ yod pa
ma yin pa la sgro btags pas na yod pa'i yons su grub
pa la skur ba btab par 'gyur bas mtha' de dag gñi
ga'i skyon spans pa ni mkhas pa yin no// de nas ni
'di ltar rnam par śes pa tsam ñid kyi mtshan ñid du
bzun zin rtogs par bya ste/ (Nagao p. 172)

⑥7 卦藏註⁶³ de nas rnam par śes pa tsam ñid la 'jug pa
na rjes su mthun pa'i pha rol tu phyin pa drug po
jig rten pa kun rdzob tu rtogs pa dan/ don dam pa
dag rtogs par bya ste/ yons su dag pa'i bsam pas
gzun bar bya'o źes bya ba'i don to/ (Nagao p. 172)

⑥8 卦藏註⁶⁴ de nas ni sa bcu po nams kyi khyad par
gyis bskaḥ pa grains med pa gsum du goms par bya

⑩ Peking, theg pa thams cad, Derge, theg pa chen po thams cad ཡུ་ལཱ་འོ་

⑪ Peking, ji sñod (yāvat) dan ji lta bzin du, Derge

...ji ita ba bzin du (yathāvat), 世親註の帰敬偈の劈頭に
 ji sñed ji ita bar (Nāgao p. 124, yāvat-yathā-bhāva)
 の用例が見られるが、その世親註に相当する玄奘訳「尽其
 所有如所有」、真諦訳「如理如量」、長尾雅人『中観と唯識』
 三三頁以下参照。